学位請求論文審査報告要旨

2021 年 7 月 14 日

学位請求者　梁　旭璋
論文題目　　日本近世煎茶書の研究：漢籍受容と文人趣味の展開を中心に

論文審査委員　　黒石　陽子
笹倉　一広
高橋　忠彦

１．本論文の内容と構成

本論文は、日本近世中期に起きた煎茶文化について、従来考察が十分には及んでこなかった煎茶書の記載内容についての調査と分析を通して、日本における煎茶文化の発生の状況、中国の茶書との関係、及びその後の展開を明らかにし、日本近世煎茶文化の実態と特色を考察したものである。

日本の煎茶文化の先行研究では、近世期に刊行された煎茶書を研究資料として扱ってはいたものの、一部の書に偏る傾向があり、その評価についても一面的であった。本論文では近世期に刊行された 51 点の煎茶書にあたり、その記載内容の分析を中心に、近世期における煎茶文化の全体像とその特色を把握することに努めた。また、これまで必ずしも十分には指摘されてこなかった、中国の茶書との影響関係について明らかにした。さらに煎茶書制作にかかわった文人たちの活動や交遊関係、近世中期から後期へさらに明治へと煎茶文化がどのように変容し、広がり、継承されていったのかについても明らかにした。

本論の構成は本編と資料編とに分かれている。本編は序章から第九章までで構成されている。序章から第一章までは本論の研究課題と研究方法、今回調査した煎茶書の定義と範囲、並びに先行研究の整理と問題点が述べられる。第二章は調査し得た 51 点の煎茶書の記載内容から明らかとなった情報について整理・分析を行い、煎茶文化の実態を考察している。第三章と第四章は中国の茶書とその日本への影響、日本の煎茶の発生との関係について考察している。第五章から第九章までは煎茶文化を創造した文人たちに焦点を絞り、考察を加えたものである。また附録の資料編は一として 51 点の煎茶書の調査結果、二として未翻刻の『煎茶訣』の翻刻と訳注である。

以下に目次を掲げる。

序章
第一節　研究対象と研究目標
第二節　本研究の位置づけと先行研究
第三節　研究方法と各章の構成
第四節　研究価値と研究意義

第一章　日本における煎茶書研究の現状
はじめに
第一節　日本における「煎茶」の語義について
第二節　煎茶の誕生までの日本茶道史
第三節　楢林忠男の煎茶道史研究について
第四節　煎茶書史料不足の問題と研究現状について
第五節　煎茶書の書誌情報研究と資料一について

第二章　江戸時代における煎茶書の全体像
はじめに
第一節　刊行時間について
第二節　編著者の出身地・身分・職業について
第三節　文体・刊写・書型について
第四節　図版について
第五節　刊記・版元について
第六節　広告・未刊書目について

第三章　煎茶書の源流をたどる：明代の茶書と喫茶文化について
はじめに
第一節　明代の茶書刊行
第二節　明代の製茶法
第三節　明代の喫茶法
第四節　明代の文人茶

第四章　煎茶書にみる中国茶書と喫茶文化の受容
はじめに
第一節　中国茶書の日本受容の形式
第二節　中国茶書の日本受容の背景
第三節　煎茶書にみる中国の製茶法の受容
第四節　煎茶書にみる中国の喫茶法の受容

第五節　煎茶書にみる中国の文人茶の受容

第五章　大枝流芳の煎茶書に関する研究：『青湾茶話』と文人雅遊
はじめに
第一節　『青湾茶話』について
第二節　大枝流芳の人物について
第三節　『雅遊漫録』と『青湾茶話』の関係
おわりに

第六章　大典禅師の煎茶書に関する研究：『茶経詳説』と『煎茶訣』を中心に
はじめに
第一節　大典禅師の煎茶書
第二節　大典禅師の茶書刊行の背景
第三節　大典禅師と『茶経詳説』
第四節　大典禅師と『煎茶訣』
第五節　大典禅師の周辺
第六節　大典禅師の茶書への評価
おわりに

第七章　上田秋成の煎茶書に関する研究：『清風瑣言』と『茶瘕酔言』にみる文人茶癖
はじめに
第一節　上田秋成と煎茶
第二節　明代文人の茶癖
第三節　上田秋成の茶癖
おわりに

第八章　陳元輔の煎茶書に関する研究：『沈山楼茶略』の日本伝来
はじめに
第一節　『沈山楼茶略』について
第二節　陳元輔について
第三節　陳元輔と程順則
おわりに

第九章　大典禅師の漢詩集に関する研究：詠茶詩にみる喫茶交遊
はじめに
第一節　大典禅師の漢詩集

第二節　大典禅師の詠茶詩
第三節　大典禅師の喫茶交遊
おわりに

附録
資料編一　煎茶書の書誌的研究
凡例
資料 1　『茶経』　資料 2　『茶録・新刻茶具図賛』　資料 3　『和漢茶詩』
資料 4　『青湾茶話』　資料 5　『茶董』　資料 6　『売茶翁偈語』　資料 7　『煎茶訣』
資料 8　『茶経詳説』　資料 9　『茶器図解』　資料 10　『考茶録』
資料 11　『清風瑣言』　資料 12　『煎茶略説』　資料 13　『自辨茶略』
資料 14　『茶史』　資料 15　『烹茶樵書』　資料 16　『茶集』　資料 17　『煎茶式』
資料 18　『沈山楼茶略』　資料 19　『煎茶斧』　資料 20　『茶瘕酔言』
資料 21　『茶史』　資料 22　『啓沃堂随筆』　資料 23　『四詠唱和』
資料 24　『淹茶式』　資料 25　『売茶翁茶器図』　資料 26　『良山堂茶話』
資料 27　『石山齋茶具図譜』　資料 28　『竹田荘茶説』　資料 29　『竹田荘泡茶訣』
資料 30　『泡茶新書三種』　資料 31　『煎茶小述』　資料 32　『梅山種茶譜略』
資料 33　『煎茶小集』　資料 34　『詠茶詩録』　資料 35　『酒茶問答』
資料 36　『新撰煎茶一覧』　資料 37　『煎茶手引之種』　資料 38　『木石居煎茶訣』
資料 39　『清風煎茶要覧』　資料 40　『仙境逸楽』　資料 41　『魁々園茶集』
資料 42　『続茶経』　資料 43　『煎茶綺言』　資料 44　『喫茶辨』
資料 45　『煎茶要格』　資料 46　『南宗茶具名牋』　資料 47　『青湾茶会図録』
資料 48　『煎茶図式』　資料 49　『蓬仙茶話　茶器編』　資料 50　『淹茶小録』
資料 51　『銕荘茶譜』

資料編二　葉雋の煎茶書に関する研究：『煎茶訣』の翻刻と訳注
第一節　解題
第二節　『煎茶訣』訳注
おわりに

終章
参考文献
初出一覧
謝辞

２．本論文の概要

序章では日本の茶道には抹茶道と煎茶道があること、煎茶道は江戸時代中後期に発生・発展し、当時の中国の喫茶法を参考とした上で独自の道を開拓し、文人の憧れの精神世界を築き上げた特色を持つことを指摘する。その特色を解明する上で煎茶書の調査分析が基礎研究として必要であり、とりわけ中国の茶書との関係性に着目することが重要であることを述べている。煎茶書の調査分析を通じて煎茶文化の実態を明らかにするともに、近世中期の文人たちの活動や交遊関係について、従来指摘されてこなかった新たな見解を示すことができるとする。

第一章では「煎茶」の語義について高橋忠彦、大槻幹郎の先行研究によって確認し、本研究の対象となる煎茶書の範囲を定めた。また楢林忠男が自身の煎茶史論で述べた煎茶書研究における史料不足の問題に着目し、煎茶に関する新資料の検討が急務であることを指摘する。さらに長谷川瀟々居、森本信光、筒井紘一、麓和善、守屋雅史らの研究の成果と不足点について検討し、これまでの研究者が研究上で採択した煎茶書について整理し、本研究で新たに発見した煎茶書について明らかにした。

第二章は整理した 51 点の煎茶書の基礎データを元に多角的な観点から分析し、その傾向や特色を明らかにした。観点は次の通りである。煎茶書の刊行時期、編著者の出身地・身分・職業、煎茶書の書型・刊写の別・文体について、刊記・版元、広告・未刊書目について。これらにより、煎茶書が江戸中期から現れ、後期になると非常に繁栄したことを明らかにした。編著者の出身地は京、大坂、江戸、尾張がほとんどであり、武家以外の漢文素養の高い庶民層であること、また文体やその内容から漢籍の受容の実態も確認された。時代が進むほどに茶器と茶席の仕様図も多くなり、煎茶の趣味性と実用性が重視されていく様子も明らかとなった。さらに散逸煎茶書についても新たな情報を示すことができた。

第三章では、これまでの日本の煎茶書研究に欠けていたものの一つとして、中国の喫茶文化史の観点をあげ、明代の茶書と茶文化について論じた。明代後期に茶書が集中的に刊行されたこと、製茶法と喫茶法の発展と変遷、泡茶法が中国の主流な茶の飲み方になったことを指摘した。また唐代の陸羽と蘆仝を代表とした茶人の著した詩文によって喫茶に高雅な精神性が寄託され、明代の文人に受け入れられて文人茶が成立したことを指摘した。

第四章では前章を踏まえて日本の煎茶書について検討した。煎茶書には中国茶書の受容過程が主に伝入・翻刻・翻訳・再編・模作・独自創作であることを明らかにした。また煎茶書の序跋を検討することによって、煎茶書の刊行の背景と編著者の執筆動機について明らかにした。それらによれば、抹茶道は拝金主義の傾向が強く、低俗化していると認識されていたこと、煎茶道においては中国から伝来した茶書に学び、喫茶精神の一新を図ろうとしていたことが明らかになった。

第五章は大枝流芳著『青湾茶話』を取り上げて、中国茶書の受容の実態、出版に際しての大坂書肆との関係について考察した。『青湾茶話』では『説郛』の中に収録されている茶書をはじめとして、大量の中国茶書を参考にしたことを確認した。また大枝流芳の人物と経歴

を調査した結果、中国の文人との共通点を見出しており、その人となりを鮮明にすることに寄与している。さらに本書によって青湾の名水が著名になったとも明らかにしている。『青湾茶話』は流芳没後に刊行されたが、これには流芳著『雅遊漫録』刊行との関係で販売促進をねらった大坂書肆の動きが関わっていることが考えられるとした。

第六章は大典禅師が江戸中期の煎茶書の編著に積極的に参与したことを明らかにした。大典禅師は『煎茶訣』（中国清代葉雋による中国の茶書）に補説を加えて編集した。また中国茶書『茶経』の最初の和訳本である『茶経詳説』を著した。この二書により、唐代と清代の代表的な喫茶法、中国の喫茶法の変遷過程が日本に広く伝わることとなった。これに伴い大典禅師の交遊関係についても考察した。

第七章は上田秋成の煎茶について考察した。秋成著『清風瑣言』は後世に大きな影響を及ぼした煎茶書である。先行研究も多いが、従来指摘されて来なかった中国茶書の受容の状況から改めて捉え直した。秋成は『清風瑣言』と『茶瘕酔言』を通して中国茶書の理論を積極的に取り入れていた。一方明代の嗜癖文化の発生と原因について検討し、明代の文人が「清」という高潔な人柄を求めていたことを指摘した。さらに秋成がそうした考え方に共鳴していた可能性を指摘した。

第八章は清代の茶書『沈山楼茶略』の発見と伝来過程、さらに著者陳元輔の人物について考察した。『沈山楼茶略』は中国ではその存在を知られず、日本にのみ伝わっていた茶書である。この書が日本の煎茶道に与えた影響を検討するとともに、従来不明であった陳元輔についても『沈山楼詩集』『沈山楼課児詩話』『中山詩文集』などを調査することにより出身地、年齢、職業、交遊関係を明らかにした。さらになぜ『沈山楼茶略』が日本に渡来したのかについては琉球王国の朝貢使程順則との関係に着目することで、その有力な渡来過程を提示した。

第九章は第六章でとりあげた大典禅師の漢詩集の中の詠茶詩を読み解くことで、煎茶書では明らかにならなかった煎茶席の状況を浮き彫りにすることが可能であることを示した。これにより大典禅師の喫茶交遊の日常、交遊関係が明らかになった。漢詩集が煎茶書研究の上で補填資料の有効性を持つことを明確にした。

附録の資料編一は本論文を作成するための基礎調査資料であり、資料編二は『煎茶訣』の翻刻と訳注である。

３．本論文の成果と問題点

本論文の成果と問題点は以下の通りである。

第一に日本の煎茶道史を研究する上で、これまでの研究では煎茶書に関する史料の扱いが不十分であったことに着目し、近世期に刊行された煎茶書を網羅的に調査し、その全体像を把握しようと努めている点にこの研究の価値がある。先行研究では各研究者がそれぞれの視点から煎茶書を研究対象として採択してきたものの、近世期に出版された煎茶書の全体像を把握する意図は見られなかった。そのため煎茶書に記載されている情報の分析が不

十分なままとなり、研究の進展が損なわれてきた面がある。本論文では 51 点の煎茶書について記載事項の調査と分析、内容の検討を行い、その全貌並びに特色を把握しようとした。

第二に、各煎茶書の記載内容の検討を元に、その成立の背景にある近世期の中国書の舶載の状況に注目し、中国の茶書の受容状況を検討し、その意味について明らかにしようとした点に価値がある。江戸の煎茶文化に、明代清代の茶書の影響が大きいことは、これまでも漠然と認識されてきた。しかし本論文ではそれを具体的、実証的に解明しようと努めている。とりわけこれまで注目されることのなかった大典禅師を取り上げ、『煎茶訣』の成立とその意味について研究を進めたことは、大きな成果として認められる。

また中国には存在を知られていない『沈山楼茶略』が日本国内で広く知られていたことについて考証した仮説は非常に興味深いものであり、福建と沖縄・日本の交流史の一端を明らかにする点でも学会に寄与するものである。

第三に煎茶書から読み取れる情報をデータとして解析し、出版の状況、煎茶書作成にかかわった編著者の身分、掲載されている事項・内容の特色と変遷、加えてそれらを購入した人々の興味や意識などを明らかにすることができた点に成果がある。およそ 150 年間の煎茶書の出版の経緯を具体的に分析し、その実態を明らかにしようとしたのは本研究が初めてであり、今後の研究の方向性を示すことになろう。

第四に煎茶に関わった近世中期の文人たちの交遊関係や、煎茶道の持つ精神性の把握とそれに対する共感と憧れがあったことを明らかにしようとした点に価値がある。上田秋成についての研究は国文学の立場からも多くの研究があるが、国学者としての秋成の側面が重視され、秋成の文人意識と煎茶道との関係について深く触れられることは少ない。本論では『清風瑣言』『茶瘕酔言』にみられる茶癖について論じ、秋成の文人意識を鮮明にした点が評価される。

一方で問題点も残されている。

第一に 51 点の煎茶書の扱いについては、附録の資料編一で「書誌的研究」としているが書誌的研究としては十分ではない。コロナ禍の下、原本調査を十分に行うことができなかったことは悔やまれる。現段階で書誌的研究成果として世に出すことは必ずしも望ましいことではない。そのため附録の資料一を削除し、加えて第一章第五節「煎茶書の書誌情報研究と資料編一について」を、本論文作成のために必要とした煎茶書の情報のみを整理した改訂稿として作成し直すよう求めた。資料編一については、今後の調査の継続によって書誌的研究として完璧を期して世に問うことが大いに期待される。

第二に基礎的研究の翻刻や翻訳に若干不十分な点が残ることがあげられる。従来の煎茶書研究では序文・跋文等についての読み取りが必ずしも行われておらず、本研究は初めて全ての煎茶書の序跋文を解読することを試みた。その基礎的研究として全書についての翻刻を先行研究の成果も踏まえて行ったが、翻刻が必ずしも万全の状況ではなく、今後一層正確な翻刻の完成をめざしていくべきである。また翻訳についても同じことがいえる。

第三に論証の緻密さに若干欠ける部分がある点があげられる。近世期の社会状況や出版

界の実態など、歴史的事項の説明の仕方に不十分な部分が見られた。

しかしながら、それらを含めても、本論文が日本近世煎茶書の研究を通して明らかにしたことは、従来の研究の水準を超え、大きな成果を示したものとして評価することができる。また個々の問題点については、梁氏にも十分な自覚があり、口述審査時の適切な応答に鑑みても、今後の研鑽によって十全に克服されることは間違いない。

４．結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、梁旭璋氏に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果の要旨

2021 年 7 月 14 日

学位請求者　　梁　旭璋
論文題目　　日本近世煎茶書の研究：漢籍受容と文人趣味の展開を中心に
論文審査委員　　黒石陽子　笹倉一広　高橋忠彦

2021 年 5 月 28 日、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者・梁　旭璋 氏の博士学位請求論文「日本近世煎茶書の研究：漢籍受容と文人趣味の展開を中心に」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、梁　旭璋 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を 梁　旭璋 氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。